

平安時代・812～813年頃／^{くわいかい}空海（^{こうぼうだいし}弘法大師 774～835）

（教科書 60・61 ページ／145～152 ページ）



概要・特徴

「風信帖」は、^{さいちよう}空海が^{でんぎようだいし}最澄（伝教大師 767～822）に宛てた手紙（^{せきとく}尺牘）である。3通の手紙をつなげて1巻の^{かんすぼん}卷子本に仕立てられている。1通目の冒頭に「風信雲書…」とあることから「風信帖」とよばれる。国宝であり、現在は^{とうじ}東寺（^{きやうおう}教王護国寺）蔵。^{おうぎし}王羲之書法をふまえながら、留学中に中国・唐で学んださまざまな書法を織り交ぜて書かれている。

1通目は、力のこもった線質、筆圧をかけた転折部など、どの文字も骨格が強く、躍動感に富んでいる。書き進めるうちに、構成がさまざまに変化する様子は、手紙ならではのものである。

作者について

^{しんごん}空海（弘法大師 774～835）は、平安時代初期の僧侶。^{さぬき}讃岐（現在の香川県）の出身で、真言宗の開祖である。あらゆる分野に秀でた万能の人であり、書においても傑出した才能を発揮した。^さ嵯峨天皇・^{がてんのう}橘逸勢とあわせて、「^{さんびつ}三筆」と称される。早くから中国の名筆に親しみ、804年に遣唐使船で唐に渡った後、さまざまな書法を吸収して帰国し、日本における漢字の書の基盤を固める役割を果たした。多数の優れた書作品や日本最古の書論を執筆するなど、日本書道史上、特筆すべき存在である。

また、空海と最澄は、それぞれ真言宗・天台宗の開祖として、平安時代の仏教界を代表する存在でもある。同じ804年に遣唐使船で唐に入り、帰国後も手紙のやり取りなど親しい交流があったが、後に密教の解釈の違いなどから決別に至ったとされる。

時代背景

平安時代に登場した空海・嵯峨天皇・橘逸勢の「三筆」は、当時尊重された中国・唐の書法を基盤としつつも、日本的な個性の感じられる書を生み出し、後に確立される「^わ和様の書」への橋渡しとなった。